

古ゲルマン語の Gerundiv-構文とその適用, 特に助動詞 „mögen“ と „können“ との比較

—古高ドイツ語 *Isidor* の翻訳を基に—

手 嶋 竹 司

提題についての論述に入る前に、本稿は今後の研究の下敷きとも言うべき一種の「研究ノート」であることをまず断っておきたい。

古ゲルマン語の話法の助動詞の問題では、その由来と歴史についてはこれまでも若干の研究がなされてはいるものの、いまだに解明がなされていない部分が多く残されている。本稿では主として古高ドイツ語の *Isidor* の翻訳に見られる話法の助動詞とその周辺をめぐって、古高ドイツ語の、ひいては古ゲルマン語の話法の助動詞の起源とその用法に関する問題の究明の一面を探ってみたいと考える。

ここではその助動詞の *mögen* (got. *magan*, ahd. *magan*, as. *mugan*, ags. *magan*, aisl. *mega*), *können* (got. *kunnan*, ahd. *kunnan*, ags. *cunnan*, as. *kunnan*) と Gerundiv-構文に見られるものとの間の、翻訳上の用法と意味機能の微細な差異について検討を加えてみることにした。

まず *mögen* から見ていくことにする。

I *Mögen* (got. *magan*, ahd. *mugan*, ags. *magan*, as. *mugan*)

(生来備わる先天的あるいは肉体的能力を表す)

ゴート語

Lk. VI, 48

jah ni *mahta* gawagjan ita

((洪水が出て、大水がその家にあふつかったが、頑丈に建ててあったので,)びくともしなかった)

Mt. VIII, 28

swaswe ni *mahta* manna us leipan pairh pana wig jainana

(人は誰もその道を通して出て行くことができないほどに)

古英語

Beowulf. 930f.

ā *mæg* god wyrcan wunder æfter wundre
(神は奇跡に次ぐ奇跡をなしたもうことができる)

Beowulf. 478f.

god ēape *mæg* pone dol-scaðan dæda getwæfan
(神はこの狂える敵のなせる技をたやすく食い止めることが
おできになる)

Beowulf. 541f.

nō hē wiht fram mē flōd-ypum feor flēotan *meahte*
(彼は私から波頭を離れて遠くへすこしも泳ぎ去ることは
できなかった)

Genesis B. 2340ff.

hē pæs mældæges self ne wēnde, pæt him Sarrāi, brȳd
blondenfeax bringen *meahte* on woruld sunu
(彼はその日には、白髪の子サラーが自分のためにこの世で息
子を生んでくれることができるとは予期もしなかった)

古サクソン語

Heliand. 1068f.

ni *mugun* eldibarn.....ēnfaldes brōdes libbien
(人はパンのみにて生きることはできない)

Heliand. 1811f.

ac *mag* im thar uuið ungiuudereon allun standan an themu
felise uppan
(しかしその建物はどんな嵐にも耐えて、その岩の上に立っ
ていることができる)

古高ドイツ語

Tatian. 134,5

nioman ni *meg* iz nôti neman fon mines fater henti
(誰も私の父の手からそれを奪い取ることはできない)

Tatian. 236,4

inti iu ni *mohtun* thaz ziohan fora thera menigi fisgo
(彼らは) 沢山の魚のためにその網を曳くことができなかった)

Otfrid. L. 89

Er hiar in thesen rediôn *mag* hôren êvangelion
(彼はこの話のなかで福音書の言葉を耳にすることはできない)

Otfrid. I. 23,47

Got *mag* these kisila joh alle these felisa...irquigken zi manne
(神はこれらの小石や岩のすべてに生命を与えて生きた人によみがえらせることがおできになる)

Isidor. 2,10

hweo dher sunu *mahti* fona fater chiboran werdhan?
(quomodo potuit a patre filius generari)
(どのようにして息子が父親から生まれるということが起こりうるだろうか)

Isidor. 11,9

hwes *mac* dhesiu stimna wesan nibu dhes druhtines
(cuius sit hec vox nisi salvatoris)
(この声は救世主のものでなくて誰の声でありえようか)

ここではラテン語の *esse* の 3 人称単数の接続法 *sit* が話法の助動詞の *mugan* (の直説法現在形) + *wesan* で表されている。

II *Können* (got. *kunnan*, ags. *cunnan*, as. *kunnan*, ahd. *kunnan*)
(生後体験なり, 学習なりにより習得した知的能力(認識, 判断力)を表す)

ゴート語

ここではこの過去現在動詞はいまだ話法の助動詞としての用法は見られない。

古英語

Beowulf. 1746

him bebeorgan ne *con*

(彼は自分の身を守るすべを知らない)

Beowulf. 182

ne hīe huru heofena helm herian ne *cūþon*

(彼らは天国の守り神を褒め称えることは夢にも心得がなかった)

Genesis. B. 18f.

synna ne *cūþon* firena fremman

(彼らは罪というものを犯す知恵さえなかった)

Genesis. B. 457

hie fela *cūðon* godes gegearwigean.

(彼らの多くの良きことをなす術を心得ていた)

古サクソン語

Heliand. 225

thô sprac eft the frôdo man, the thar *consta* filo mahlian

(多くのことを語ることのできる賢い人はそのとき語った)

Heliand. 1669

sie ni *cunnun* ênig feho uuinnan

(彼らは一匹の家畜も手にする術もなかった)

Heliand. 2530f.

Nio hie sô uuîdo ni *can* te githenkeanne

(そこでは誰もそこまで考えが及ばなかった)

古高ドイツ語

Tatian および Isidor にはこの *kunnan* の用例は見つからない。

Otfrid. I. 1,119f.

Ist ther in iro lante iz alleswio nintstante, in ander gizungi
firneman iz ni *kunni*

(フランケン人たちの国に、他の言語では福音書を理解できない人がいるならば)

Ⅲ これまでにの用例に対して次のような例文のあることが知られているが、このことをどのように解釈したらよいのだろうか。

古高ドイツ語

Otfrid. II. 9,55f.

In thiu...*wâri* follon *zi erkennenne mannon*, thaz er got
forahta

(ここでは彼が神を怖れていることは人も十分に納得のいくことであろう)

Otfrid. V.19,13

In thie thoh ubil thanne *nist* wiht *zi zellenne*

(彼らに対してはなにも悪しきことを数え上げることはできない)

Otfrid. V. 17,5

Nist iu....noh *manne thaz zi wizanne*

(もちろん人にはそれを知る術はない)

Isidor. 3,6

zi wizssanne ist nu uns chiwisso, dhazs fater einemu ist dhurahchunt

(そのことは主のみが知っていることだということは、私達も今知ることができる)

zi wizssanne.... (lat.) *scire* と不定詞が使われている。

Isidor. 7,7

dhazs ist nu unzwiflo sô lechtsamo zi firstandanne, dhazs....

(そのことは今ではもちろん容易に納得のいくことである)

ist firstandanne.... (lat.) *accipitur* と現在受動形が使われている。

Isidor. 33,11

in dheohe ist chiwisso zi firstandanne framchumft

(なんとすれば氏素性は太股を見れば知ることができる)

zi firstandanne..... (lat.) *intellegitur* ここでもラテン語では受動形が用いられている。

古アイスランド語では Gerundiv ではなくて不定詞が用いられている。

これまでに挙げた例文に見る限りでは、*zi*+Gerundiv の Gerundiv におかれている動詞のほとんどすべてが人間の認識または判断に関わる動詞であることを知ることができる。なお加えては、その認識の主体と考えられるものは、ここでは限定された特定の個人乃至は集団ではなく、

普遍的・総称的に妥当性をもつ場合に該当する事柄として述べられているものと見なしうるのである。ではこのような事情はいったい何を物語っているのだろうか。その時にまず考慮に入れておく必要のあることは、ゴート語にも、そしてまた Isidor, および Tatian などには *kunnan* の例文が見られないということがある。

それは比較的古いとされる文献には過去現在動詞はいまだ助動詞としての用法が確立されておらず、本来的な意味合いをもつ動詞として、即ちその語源から見て、*verstehen*, *begreifen*, *erfahren*, *ersehen*, 及び *wissen* 等の意味機能を保持していたと見ることができる。即ち語源的にラテン語の *gnosco*, ギリシャ語の *γινώσκω* と同根の動詞である。このことを考えると、*kunnan* のいまだ助動詞化を知らないゲルマン語では上に挙げた例文にみるような認識、判断や知覚に関するような意味の上で競合するような動詞との共生や接合には抵抗があったと見ることができ。なおここに語源的にこの *kunnan* の分詞からの派生語である現代ドイツ語の *kund*, *Kunst*, *kennen* などに共通する原義を考え併せるならば、この動詞は後天的な知的能力を基本的な意味として持っていたことが分かる。

なおここで一考を要するのは、この構文では、即ち *zi*+Gerundiv の構文では、現代ドイツ語にみる未来分詞の用法に共通する点のあること、換言すれば、意味の上では受動的であるということである。このことについては Kelle は次のように説明している。

Der Inf. mit *zi* drückt nämlich auch etwas aus, was geschehen kann. Der ergänzende Dat. drückt wie beim Gerundium die Person aus, von der etwas getan werden kann. (Kelle, J. : Evangelienbuch. III. Teil. Glossar der Sprache Otfrids. S.318)

さてもう一つ注目すべきは例えば Isidor に見るところでは、この ahd. の Gerundiv の構文はラテン語の原典では動詞の受動形が用いられているということである。このことは上の Kelle の説明と大方一致する。

さらに次の例文とも比較検討する必要があるかと思う。

Otfrid. V. 17,33

iz ist zi lang manne sus al zi nennenne, al thaz seltsâni

thes himiles gimali

(これらのすべて、天国の絢爛豪華なことの不思議なことをすべていちいち数えあげるとは誰にとっても、あまりにも大変なことである)

Otfrid. V. 19,7

Zi zellennne ist iz suâri !

(語ることは骨の折れることである)

Heliand. 1779f.

ôði is tharod te faranne eldibarnun

(この世の人にはそちらに行くことは苦もないことである)

これらの構文では、それぞれに形式上の主語と見なしうるもの *iz* がおかれている。

しかしここに問題にしている構文では *thaz* (*dhazs*) が明らかに文意からみて Gerundiv の意味上の目的語としてしか解釈できないし、またそうした意味からも形式的な語 *iz* ではなく、重い指示代名詞または実質名詞が主語の位置に置かれている。このことから、これら二つの構文は構造的にも、また意味の形式からも異なるものと見ることができる。

また参考までに申し添えておこならば、Isidor ではラテン語の *posse* (nhd. *mögen, können*) にすべて *magan* が当てられている。

さらにつきぎのような例文もみられる、

Otfrid. IV. 11,28

iz wirdit etheswanne thoh iu zi wizanne

(おまえ達もこのことをいつか知るようになるであろう)

ここにも *iu* はどちらかと言えば *werden* につくものと解するほうが構文にかなった解釈と考えられる。

またこれまでに見てきたのと構文的には一見して大変よく似ているように見える構文があるが、いまそれと比較し、検討してみるならば、

Otfrid. II. 9,73

lang ist iz zi *saganne*, wio iz quimit al zisamane

(そのことがどのようにして同時に起こるのかということを説明するのは、かなり厄介なことである)

ここでは文意からも *iz* は仮主語として立っていて、*zi saganne* 以下を受けていることは疑う余地のないことである。このとき今一つ注意しておかなければならないことは、主語と不定詞の間には形容詞の存在することである。これらのことを総合して考えるに、本論において問題として取り上げている構文との相違点として、まず挙げられることは、主語の扱いが異なるということ、については *zi+Gerundiv* に対してなんらかの主意的な判断がなされているかどうかの問題になる。

なお更に問題にしている *zi+Gerundiv* の構文に現れる Dativ について若干触れておきたい。この Dativ については論者も以前に触れたことがあるが、今ここに改めてその説明を加えておくならば、まずゴート語にその用例を見ることができる。

Lk. XVI,22

warp pan gaswiltan *pamma unledin*

(そのときその貧しきものに、死ぬということが起こった)

ここで *gaswiltan* (死ぬ) という事態が貧しき人に起こるのであるが、そのことは取りも直さず「貧しき人」が *gaswiltan* 「死ぬ」という行為の意味上の主語の働きをしていることになる。こうした Dativ の用法は殆どの古ゲルマン語に見られる。即ち *sein* もしくは *werden*、及び *geschehen* という動詞とともに用いられるとき、往々そこに立つ Dativ の「人(Person)」になにかが授与されることを意味する。

古英語

Beowulf. 1280

pā ðær sōna wearð edhwyrft *eorlum*

(そのときすぐに人々にもとの状態(混乱)が起こった)

= (人々はもとの混乱した状態にもどった)

古高ドイツ語

Otfrid. V. 21,14

waz thunkit thih sī *themo man*

(汝の考えることがその人に起こるのであろう)

Otfrid. L. 83

Allēn sīnēn kindon sī richiduam

(彼の子供のすべてに統治権が与えられますように)

Otfrid. IV. 11,28

iz wirdit etheswanne thoh *iu zi wizanne*

(汝らはいつかはそのことを知るようになる)

古サクソン語

Heliand. 2504f.

than uwas *imu* that luttill fruma, that he it gio an is hertan
gehugda

(その時彼がそのことはいつか思い出すというささやかな利得が与えられた)

こうした Dativ は以下に挙げる新高ドイツ語の語法に共通するものであることを見て取ることができよう。

Ihre Miene gab *mir* ihre Absicht *zu verstehen*

(彼女の顔色から彼女の心を読み取ることができた)

最後に本稿に掲げた *zi*+Gerundiv の構文の成立の背景と並びにその構文に寄せられた意味特性についてまとめておくとするならば、以下のようことが言えるのではないだろうか。まずこの構文の用いられる環境というものを見てみるに、それが *magan* が人に先天的に与えられたか、もしくは自然的な結果として人に授かる能力に関するような場合に適用されるのに対して、もう一方の *kunnan* のほうはというと、それは人が後天的に学習を通して習得した精神的、知能的な能力に関する場合

に用いられたと見ることができるのではないであろうか。そのことはこの語の語源からしても首肯できることである。したがって *kunnan* がいまだ完全に助動詞化していないような段階にあるよう場合には、またそれが人の学習による能力に関するような動詞の場合には、その意味からも並立するには、両者の間に互いに重複し^{はじ}弾きあうようなことがあったのと、上に見たようにこの構文にはもう一つの特性があった。それはそれが特定の個人とか、特殊の定まつた人達に関するのではなく、一般的・普遍的な事柄に関する叙述に多く用いられたという特別の事情が働いていたと考えられるのである。このようなことから総合して言えることは、この語法の用法においては、いわゆる Modalität という主観性は表現面の背後に追いやられて薄められると見ていいかと思う。また次の例文は助動詞化する以前のものを示しているように思う。

Heliand. 2528ff.

himiles riki, sô endilôsan uuelon, sô that ni *mah* ênig man
uuitan an thesaro uueroldi. Nio hie sô uuîdo ni can *te*
gethenkeanne, thegan an is muode¹

(尽きることを知らない、誰もこの世で知ることのできない
天国、誰もそこまで遠く心に思い描くことのできないのである)

ここで *witan* と言っているのは人がこの世に生まれて以来自然に直感的に感じているような知識について述べているのに対して、後の方では人が自分の心に思い描くような人の認識努力を必要とする想像力のことを述べている。また *kunnan* (上例では *can*) に Gerundiv 構文が用いられている点も、これまでの論述から納得がいくように思う。即ちここでは、いまだ完全な助動詞としては機能しておらず、原義の陰影を留めているように感じられる。いずれにしても、この例文はこれまでの論考を根拠づけてくれているよう思う。

ここでついでに Isidor に見られるそのほかの例文についても考察しておこう。

Isidor. 16,5

dhâr *ist* auh in dhemu gotes nemin fater *zi firstandanne*; in

dhemu êristin *ist* sunu *zi archennanne*, huuwanda ir selbo quhad

(そこでもまた神の御名に父が理解されうる(父を知ることができる), 天地の始まりということの中に息子というものが認められる, その人自身が言っているから)

ist zi firstandanne.... (lat.) intellegitur

ist zi archennanne.... (lat.) agnoscitur

Isidor. 21,5

Endi dhoh dhiu hwedheru in dhemu bauhnunge dhero dhrio heido gotes ni *sindun zi chilaubanne* dhazs sii dhrii goda siin

(しかし神の三位一体という言葉の中に, それらが三つの神であるというふうには信じられない)

sindun zi chilaubanne.... (lat.) credendi sunt (gerundivum 信じられる)

これらの例文においても上に挙げた例文と同様に Gerundiv に置かれている動詞はすべて我々人間の主観の思念や認識に関わる動詞であることが知られる。

その他の場合にはラテン語の動詞の受動態は殆どが次のように Isidor でも, そのままに受動に訳されている。

Isidor. 32,9

dhazs ir iesus *uuardh chinemnit* in bauhnungum dhesh chiuuarin iesuses

(彼イエス・キリストは真の名称で名づけられた)

wardh chinemnit.... (lat.) ut ...nominarentur (接続法の過去)

(ahd.ではラテン語の目的文が結果文として直説法で表されている)

Isidor. 1,9

mit sô mihhiles haerduomes urchundin *ist* nu sô offenliiho
armârit, dhazs christ gotes sunu aer allem weraldim fona
fater *ward chiboran*

(たいそう立派な典拠のある書物でもって、神の子キリストが
すべての世の前に父から生まれたことが知られた)

ist armârit..... (lat.) *declaratur*

ward chiboran... (lat.) *genitus esse*

ラテン語では *declaratur* の内容は不定詞構文になっている
が、ahd.の Isidor では *daß* を使った名詞文の構造をとっている。

Isidor. 1,14

dhanne *ist* nu *chichundit*, dhazs fona dhemu almahtigin
fater dhurah inan *ist* al *wordan*, dhazs chiscaffanes *ist*
(その時より今に、全能の父(神)によって創造物がすべてその
方のお力により起こったことが公に知られている)

ist chichundit..... (lat.) *noscuntur*

ist wordan..... (lat.) *creata esse*..

ラテン語の *creata esse* という完了の受動が Isidor では自動詞 *werden*
のいわば完了時称で表されている。このことも Isidor 訳の微細な点に至
るまで精細であろうとする神経の細やかさを物語っている。

Isidor. 8,9f.

odho mahti angil sô sama sô got mannan chifrumman?
dhazs sô *zi chilaubanne* mihhil wootnissa *ist*. Hwemu *ist*
dhiz nu *zi quhedanne* odho zi hwes chiliinissu *wardh* man
chiscaffan...?

(あるいは神と同様に天使もまた人を創造することができる
のか、そのようなことを信じることは大変愚かな知恵である。
このことは今誰に言われているのか、また誰の姿に似せて造
られたのか)

ist zi quhedanne.... (lat.) dicitur

wardh chiscaffan.... (lat.) conditus

ここで注目すべきは

mah̄ti (ahd.) potuit (lat.)

(天使に備わる能力に触れてのこと)

dhazs sô zi chilaubanne ist (ahd.)quod ita existimare (lat.)

このところの意味は(*dhazs sô (ahd....quod ita (lat.)*). (このようなことを信じるとは....)とすることである。

ist zi quhedanne (ahd.)dicitur (lat.).

ラテン語の受動の現在形に対して Isidor では Gerundiv になっているが、これは読者なり、聞く人一般に言われている。ところが

wardh chiscaffan (ahd.)conditus (lat.)

ラテン語では *homo* と同格の過去分詞として立っている。そこで Isidor は述語動詞を使って、ラテン語の表現の意味を汲んで動作受動的なものとして訳出している。

以上のようなことを総合してみると、やはり上 Isidor をはじめ古ゲルマン語の *zi*+Gerundiv の構造は、もともと普遍的・一般的な事情や事態の説明に用いられていたということが明瞭になったかと思う。なお *können* と *mögen* の点に関しても、上に述べた説明が古ゲルマン語、特に古高ドイツ語の場合にはなされるように思う。

なお更についでに次の例文を比較して検討してみるならば

Isidor. 1,10f.

ist nu sô offenliihho armârit, dhazs christ gotes sunu aer allem weraldim fona fater ward chiboran

(天地創造以前に息子は父から生まれたと説き明かされている)

(ante omnia saecula filius a patre *genitus esse declaratur*)

ここではラテン語の受動形(*declaratur*)に Isidor では(*ist armârit*)と同じく受動形に対応しているのに、次の例文では

Isidor. 8,14

hwemu *ist* dhiz nu *zi quhedanne* odho zi hwes chilihnissu
wardh man chiscaffan

(cui ergo *dicitur* aut ad cuius imaginem conditus homo
creditur)

(このことは誰に対して言われうることか、まだどなたの姿に
似せて人は創られたのか)

ここではラテン語の受動形(*dicitur*)に対して Isidor では *sein* + 不定
詞がたっている。

この訳し方の違いに注目して上の二つの例文を比較検討してみるなら
ば、Isidor 1,10では説明の内容は聖書などを通して明らかな事実として
受け止められて現在に至っている事柄である。これに対して Isidor 8,14
ではその時点で人々が言いうる事柄として述べられている。このことか
らも Gerundiv-Konstruktion が、その時点において一般的に妥当なもの
として認めうることを挙げるのに用いられる構文と見なしうよう思わ
れる。

さらにここで今一度受動形に動作受動と状態受動の区別を暗示するも
のが Isidor あたりすでにその萌芽の兆していたことが知られるので、
その辺の事情を例文により考察を試みることにする。

例えば Isidor 1,10

ist armârit (declaratur)

Isidor. 22,11

endi *wirdit* siin namo *chinemnit* wundarliih

(vocabitur)

(その人の名は世にも珍しき不可思議な人と呼ばれるであろ
う)

Isidor. 5,12

dhazs dhar *ist* christ *chizeihnit*, sô auh fona dhes chrismen
salbe *ist* chiwisso christ *chinemnit*

(vocabitur)

((そこでは汝は耳にするであろう)キリスト即ち塗油の儀式

を受けることによって、まことにキリストと名づけられている)
る)

ラテン語の方ではともに受動形が使われているが、一方の Isidor では *sein* + 過去分詞と *werden* + 過去分詞と使い分けがなされている。そのことは二つの文の意味の上から *sein* の場合は状態受動、そして *werden* の場合は動作受動と、かなり分明に使い分けられていることを知ることができる。

Ⅰ. 使用テキスト

- 1 *Beowulf*, hrsg. von Else von Schaubert. 1. Teil : Text. München. Paderborn. Wien. 1963.
- 2 *Die ältere Genesis*, hrsg. von F. Holthausen. Heidelberg. 1914.
- 3 *Die gotische Bibel*, hrsg. von W. Streitberg. Heidelberg. 1950.
- 4 *Heliand*, hrsg. von Otto Behaghel. 8. Auflage, bearbeitet, von Walther Mitzka. ATB. Nr. 4. Tübingen. 1965.
- 5 *Otfriids Evangelienbuch*, hrsg. von Oskar Erdmann. 6. Auflage, besorgt von Ludwig Wolff. ATB. 49. Tübingen. 1973.
- 6 *Tatian*, lateinisch und althochdeutsch, hrsg. von Eduard Sievers. 2. neubearbeitete Ausgabe. Paderborn. 1892.

Ⅱ. 辞書

- 1 *Beowulf*. 3. Teil: Glossar, hrsg. von Else von Schaubert. München. Paderborn. Wien. 1963.
- 2 Braasch, Th.: Vollständiges Wörterbuch zur sog. Caedmonischen Genesis. Heidelberg. 1933.
- 3 Schützeichel, R.: Althochdeutsches Wörterbuch. Tübingen 1969.
- 4 Sehrt, E. H.: Vollständiges Wörterbuch zum Heliand und altsächsischen Genesis. Göttingen. 1966.

Ⅲ. 参考文献

- 1 Behaghel, Otto : *Deutsche Syntax*. II. Die Wortklassen und Wortformen, Heidelberg 1924. § 722.S.310 Der Inf. von *zi* von begleitet : bei *kunnan* : といつてこの箇所を引用している。

Gerundiv-Konstruktion und ihre Verwendungsmöglichkeit in den altgermanischen Sprachen, besonders im Vergleich mit den modalen Hilfsverben „*mögen*“ und „*können*“

— anhand der Belege aus der ahd. *Isidor*-Übersetzung —

Takeshi TESHIMA

- 1) Das modale Hilfsverb „*mögen*“ wird eigentlich in den altgermanischen Sprachen zur Bezeichnung der körperlichen wie auch geistigen Kräfte benutzt, die dem Menschen a priori beschieden ist.
- 2) Dagegen verwendet man das modale Hilfsverb „*können*“ hauptsächlich zum Ausdruck der menschlichen Fähigkeit, die man sich aufgrund von Erfahrung und Geistesvermögen (aposteriori) erworben hat. Das ist etymologisch einleuchtend, man denke etwa auch an „*Kunst*“, „*kennen*“, „*kund*“ usw. (vgl. lat. *cognosco*, gr. *γινώσκω* = nhd. *erkennen*) Sie bezeichnen alle eine höhere Geisteskraft. Aus diesem Grund konnte man in dem altgermanischen Sprachgebrauch das Wort „*können*“ meistens zu einem selbständigen Verbum finitum machen, deshalb steht es als modales Hilfsverb sehr selten, und erst später konnte es als modales Hilfsverb verwendet werden.
- 3) Im Vergleich zu den oben angeführten modalen Hilfsverben gebraucht man die Gerundiv-Konstruktion, wenn man die Sache im allgemeinen geltend machen kann oder man imstande ist, sie

empirisch zu erkennen.

In den altgermanischen Sprachen kann man vor allem in der althochdeutschen *Isidor*-Übersetzung feststellen, daß die Konstruktion besonders zum Ausdruck einer Tatsache Verwendung findet, wenn man die Tatsache für allgemein wahrnehmbar und ersichtlich hält. Aus dem, was oben dargelegt wurde, läßt sich schließen, daß diese Gerundiv-Konstruktion die sogenannte Modalität wahrscheinlich stärker in den Hintergrund drängt als die Konstruktion mit dem Hilfsverbum.

Die oben dargestellten Einzelheiten lassen ahnen, welche sorgfältige Aufmerksamkeit der althochdeutsche Übersetzer von *Isidor* auf seine Übersetzung gerichtet hat.

Darüber hinaus kann man wohl aus diesem Sachverhalt auf den Ansatz zum Entstehen der modalen Hilfsverben schließen.